

蟻と  
デイトレーダー

ヨコテ

大学を出てからの半年間、角倉俊秀はほぼ一日中パソコンの前に座っている。真新しい二台のパソコンを前に腕組みして椅子にのけぞり、画面に見入っている。

株価のチャート。

画面に映る数字の羅列と無機質なグラフ——今の俊秀はそのことに集中していた。思い出したようにキーを叩いてはマウスを握り、そしてまたキーを叩く。株価の上下は俊秀に心地いい刺激を与えてくれた。大抵は予想したとおりに株価は動き、そんなときは自分の優秀さを誉め讃えてひとり悦に入った。が、たまには予想に反した動きをすることもあり、そんなときは不慮の軽い事故だと思った。パソコンのキーを叩く音と、エアコンの作動音が微かに聞こえるだけで、俊秀の部屋は静寂そのものだった。

俊秀はこんなことを仕事にするとは夢にも思っていなかった。有名銀行の役員である父のあとを追い、一流大学を出て一流企業に就職する、それが既定路線であり、その成就に何の疑いも持っていなかった。就職課もゼミの教授も、君の成績なら何も問題はないだろうと言ってくれ、実際、コンタクトを取っただけで内定を匂わす会社はいくつもあった。事は順調に運ばれるはずだった。

だが——最初に受けた面接で俊秀は大きな挫折を味わった。

入社する気のない会社を受けても時間の無駄だと思っていたので、予行演習は何もしなかった。そのために俊秀は、知らなかった自分の一面を面接会場でいきなり知ることとなった。

第一志望だった『ムトウ・エレクトロニクス』の面接に意気揚々と向かっていた俊秀は、会場が近づくにつれ足が震えてきた。異常に緊張している自分に困惑し、自分の精神状態が理解できなかった。些細な面接じゃないかと自分に言い聞かせ、落ち着こうと深呼吸をしたが、深呼吸をすればするほど俊秀の鼓動は早くなった。

震える足で面接会場に入ると、鼓動はますます早くなり、目が霞んでしまい、面接官は陽炎のように揺れてぼやけていた。頭の中が真っ白になり、面接官に何を訊かれたのか、自分がどう答えたのか、全く分からなくなってしまった。おそらく何かとてつもない間違い、あるいは的外れなことを口走ってしまったのだろう、正面に座る面接官が嘲笑しているようだった。異常に緊張し、あがりまくっていたにも拘わらず、それだけは認識できた。そのあと、どうやって面接会場から帰ったのか覚えていない。全くの空白で、気がついたら自分の部屋のベッドで横になっていた。当然、『ムトウ・エレクトロニクス』から二次面接の案内はなかった。

第二志望、第三志望と、一応の次の候補はあったが、どうでもよくなった。『ムトウ・エレクトロニクス』に入れるものと信じていたので他の会社は真剣に考えていなかったし、入社したところで働く意欲は失せていただろう。また、受けたところで今日の失態を繰り返すだけだとも思った。あの悪夢を再び演じたくなかった。

それから俊秀は人と会うのを避けるようになった。自分のあがり性を笑われている気がして、他人の目が嫌でならなかった。自分の部屋で過ごすことが多くなり、引きこもりの状態がしばらく続いた。他にやることもなく、日がな一日、テレビゲームに没頭した。

関連会社に入れるように便宜を図ってやる、と父は言ってくれたが、その言葉を俊秀は無視した。それでは、追いついてやがては父を追い越すという俊秀の野望は永遠に果たされなくなり、一生父に隷属した存在となってしまう。一時的な挫折を味わってしまったが、いつかきっと復活を果たし、自分の優秀さを見せつけてやりたかった。それに、父がそんなことを言い出したのは息子の将来を心配してではなく、この時期に就職先が決まっていない息子を恥じているからだ、と分かっていた。言葉の端々、態度でそれと知れる。

それまで大人しく勉強ばかりしていた息子の急変に、母は戸惑った。就職もしないで毎日ゲームばかりしている息子にどう対処したらいいか分からず、腫れ物に接するようになった。暴力を振るわれるとでも思っているのか、いつも顔を伏せていて、怯える猫のように躰を小さくしていた。

甘えているんだ——。

それが母に言う父の口癖になった。ときには聞こえよがしに、リビングから大きな声で、部屋にこもる俊秀に向かってわざと言うこともあった。甘えているつもりはない。ただ深い森に迷い込んでしまい、道標となる光を探してはいるが、それが見つからないだけだ。だが現状がこうであれば言い返せる言葉はなかった。俊秀はひとり模索した。今のままでいいはずがないのはよく分かっている。このまま父の庇護の元で、父が自分の栄光を誇示するかのように入居した瀟洒なマンションに安穩と住んでいくはなかった。父は地道な努力の結晶である、普通のサラリーマンには手の届かないこの豪華なマンションに多大な思い入れを持っていたが、俊秀にはそんなものは何もなかった。むしろ引っ越してきた当初は恨んでいたほどだった。ちょうど中学生になったばかりの頃で、新しい学校の同級生に俊秀は近寄りやすい存在であるかのように、勝手に特別視された。転校生の宿命なのかもしれないが、裕福で成績のいい自分を妬んでいるだけだろう——そう思うとこちらから皆の中に入って行く気は起きなかった。

近いうちに父母の住むこのマンションから出て行く——。そのつもりでいたが、この街から離れたいとまでは思っていなかった。大学のゼミで一緒だった浅井美沙が近所のマンションでひとり暮らしをしていて、初めてその事実を知ったとき俊秀は喜びに酔いしれたものだった。同じゼミをとったことにも幸運を感じたが、近くに住んでいるとなるとそれはまさに奇跡的な僥倖だと思えた。駅までの道でバッタリ出会ったり、帰りが一緒になることがあるかもしれない——。

だが、美沙のマンションまで数分の距離だったにも拘わらず、尋ねていくことは躊躇われた。向こうも自分が近くに住んでいるのは知っているのだから尋ねて行ってもおかしくはないと思ったが、ゼミでしょっちゅう顔を合わせていることもあり、変な風にとられるのが怖かった。卒業した今でもそれ以上の関係になりたいと夢想している。しかし、このままではどうにもならないという現実が眼前に突きつけられ、美沙の前に立派な男として、変な風に誤解されない男として姿を現すためにも俊秀は金を稼いだかった。

何をすればいいのか、何をしたいのか、ハッキリした意志のない俊秀だったが、ひとつだけ分かり切っていたことがあった。それは自分が会社勤めに向いてないことだった。組織の中で働いていれば、いずれまた例の失態を犯すことは目に見えていた。そこで俊秀は起業を考えた。少ない資本で始められる事業はないかと思い、散歩の途中でぶらりと本屋に寄った。そしてそういった本を探し回っているうちに、株関連の本に目を留めた。

デイトレード——どうして思いつかなかったのだろう。今の自分にピッタリだ。自宅にいながら金が稼げるし、人との煩わしい接触もしないで済む。何より、稼げる金が莫大だ。

数冊買い込み、俊秀は一心不乱に勉強した。銀行勤めの父と違って株に詳しいわけではなかったが、経済用語の解説本を横目にしながら読み進めていくと、何とかおおよそのことは理解できた。デイトレーダーのブログを読んでいると自分にも出来そうな気になってきて、俊秀はデイトレーダーという仕事にすっかり魅了された。成功は約束されたも同然だと思った。だが、根本的な問題があった。俊秀には元手となる資金がなかった。割と裕福な家庭だったので小遣いには恵まれていたが、あればあっただけ遣っていたので金を貯めたことがなく、俊秀の手元には三万しかなかった。まとまった金を得るために、俊秀は父に頭を下げた。

遅く帰ってきた父はダイニングテーブルで高級スコッチの水割りを飲んでいて、珍しく顔を見せた息子に戸惑っている。

「いつまでもぶらぶらしてられないから、デイトレードを始めようかと思うんだ」

父の傍らに立ち、グラスの氷を見ながら俊秀は言った。

「デイトレード？ そんなものが上手くいくと思っているのか？」

不愉快そうに父が訊く。飲み始めたばかりのはずなのに、すでにその目は赤みを帯びていた。

「いかせてみせるよ。だから資金として……百万貸して欲しいんだけど」

「たまに顔を見せたと思ったら金の無心か。駄目に決まっているだろう、そんなくだらん話」

「勉強したんだ、ちゃんと。デイトレードで成功した人は多いし、大丈夫だと思うんだ」

「デイトレードのことなら俺の方がよく知っている。お前の考えは甘いんだ、失敗するに決まっている。いいか、成功した人も中にはいるだろうが、大半は損をするんだぞ。成功できるのはほんの一握りにすぎないんだ。軽い気持ちで初めて成功できるほど甘くはない。証券会社へ手数料をくれてやるだけだぞ。それが分からないのか？」

「そうかもしれないけどやってみたいんだ。成功するかどうか、やってみなくちゃ分からないじゃないか。百万はきちんと返すから。たとえ失敗したとしても、バイトでも何でもして返すから」

俊秀は必死に父を説得した。ここで父に見放されてしまったら、デイトレードの仕事を始められなかったら本当にこれから先どうしていいのかわからなかった。

「何でもするだと？ 何を今さら。そんな意気地があるのならどうして関連会社の話を蹴ったんだ。そんなに簡単な話じゃなかったんだぞ。いろんな人に頭を下げて、試験を受ければ入れるようになっていたのに、それをお前は台無しにして……」

「悪かったよ。でも、自分で何とかしたかったんだ」

「それで何とかなったか？ ただ引きこもっていただけじゃないか。お前は自分の力量が把握できていないんだ。自信を持つのもときには大事だが、今のお前は自分を過信している。そんな奴は失敗するに決まっているんだ。たった一度だけ面接に失敗したくらいで引きこもるような奴に何が出来るんだ？ 失敗したらバイトをしようと言うが、お前にバイトが出来るのか？ やったことがないだろう。バイトにしる、社会人のひとりだ、我慢しなくちゃならないことは山ほどあるんだぞ。その度にバイトを辞めるのか？ 俺は我慢してきた。コツコツと毎日努力してきた。だから今の地位に昇ることが出来たんだ。お前に出来るのか？」

父が氷を口に含み、噛み砕く。

「まあいい。社会勉強だ、とにかく百万は貸してやる。金を稼ぐことがどんなに大変なことなのか、身をもって知るんだな。スッカラカンになったら目が覚めるだろう」

俊秀は、息子の失敗を疑わない父から何とか百万を借りることが出来た。父の言葉に多少の腹が立ったものの、それは父なりの叱咤激励だと思った。

探り探りで始めた当初は損得の出入りが激しく、危うく父の言葉を照明する羽目になりかけた。しかし、半年も経った今では安定していて、投資金額も日に日に増え、預金残高は数千万にもなり、この僅かな期間で俊秀は父の年収を軽く超えてしまった。早く帰宅した日に専門家として、損失を最小限に食い止めようとアドバイスをしていた父は、今では何も言わなくなった。共通の話題で久しぶりに親子らしい会話が出来たのも束の間で、また以前と同じように不機嫌な顔で高級スコッチを飲んでいる。息子の成功に嫉妬しているのだろう、そんな父が小さく見え、俊秀は哀しくなった。

ずっとパソコンの前に座っていて運動不足になりがちな俊秀は、毎朝の散歩を日課とした。仕事を始める前に町内をぐるりと一周し、近くの公園で一休みして家に帰るのが散歩のコースだ。青いTシャツにジーンズ——ジャージが自分に似合わないことは知っていたし、本格的に運動をするつもりではなかったのだから、それがいつもの格好となった。三十分ほどの散歩の途中で浅井美沙のマンションの前を通るのもコースに入っていた。散歩のほとんどの目的はこちらで、歩き回ることは付け足しといってもよかった。そんな中での偶然の再会を期待していたが、美沙の出勤時間と違うのか、俊秀の策略は今のところ徒労に終わっている。

この日もいつものように俊秀は散歩に出掛けた。九月末だというのに、妙に暑い朝だった。

今日も偶然の再会は果たされないまま美沙のマンションの前を通り過ぎると、俊秀は真夏のような暑さに急いでコンビニに立ち寄った。棒付きのアイスクャンディーを買い、近所の公園へと向かう。公園では数人の老人がゲートボールをしていた。いつも見掛ける顔だが挨拶はしない。知り合いになってしまうといろいろ訊かれそうで、それが煩わしかった。その老人たちが俊秀を見るとヒソヒソ話を始め、帰り支度を始めた。自分を避け、逃げていったように思え、俊秀は不愉快になった。舌打ちしてベンチに座り、アイスクャンディーを食う。汗を掻いた身に冷たいアイスが心地いい。だがそれは、長くは続かなかった。溜め息を吐き、晴れ渡った空を漫然と見上げる。こんなに天気がいいのに、これから帰って仕事を始めるのかと思うと、何となく疎ましい思いがした。デイトレードの仕事が嫌になったわけではないが、熱情は薄れていて以前ほどには気が進まない。

しばらく遊んで暮らせるだけの金は稼いだ。何もあくせく働く必要はない。

ふと足元を見ると、数匹の蟻が動いていた。餌を求めて彷徨っているのだろう、右へ行ったり左へ行ったりしている。行き先が定まらないようで、俊秀のスニーカーの周りをうろうろしている。

アイスの匂いを敏感に嗅ぎつけたようだ。

そんなに欲しけりゃくれてやるよ。

俊秀は残り少なくなっていたアイスを、棒ごと足元にいる蟻に向かって放り投げた。空から突然振ってきた謎の物体に蟻たちは戸惑いと恐れを見せ、一瞬離れて警戒しているようだったが、それが敵ではなく餌だと分かると一斉にたかり始めた。何かの合図があるのだろう、蟻は次第にその数を増やし、群がってアイスを真っ黒に覆った。

アイスから一筋の黒い列が伸びている。うねうねと曲がっており、直線的にアイスを目指せばいいものを何かの危険を避けているのか、前の蟻が進むのを少しも疑わずに付き従っている。それはあまりに無駄な道に思えた。危険を冒さず、安全な道を通り、命令のままに仕事をこなせば、やがてそれが幸福へと繋がる——。蟻に人生を諭されているようで、俊秀は無性に腹が立ってきた。ベンチから立ち上がると、俊秀はアイスにたかる蟻を踏みつぶした。アイスが砕け、粉々になる。多くの蟻が死に、その死骸は黒胡麻のようだった。自分が食べていたアイスには黒胡麻がかかっていたのではないかと錯覚を起こしかねないほどで、俊秀は妙な可笑しさが込み上げてきて笑った。そのまま観察を続けていると、逃げ散った蟻はすぐに引き返し、あとからやってきた蟻とともに砕けたアイスをあつという間に真っ黒にした。

思いがけない御馳走の出現に、命がけで獲ってこいと厳命されているのだろう。強大な敵が出現したというのに怯むことなく、蟻はあとからあとから数を増やしている。その列は公園の端の植え込みに続いていた。公園の横の小道に沿ってツツジの木が植えてあり、春には綺麗な花を咲かせてくれる。そこに巣があるようだ。俊秀はアイスの棒を蹴飛ばし、蟻の列を足で踏み荒らした。乾いた土埃を立てながら公園の端へを向かう。ツツジの木の陰に蟻の巣があった。そこから数多の蟻が出入りしていて、振り返ると、蹴散らした蟻は元通りの、うねうねと曲がっている道をつくっていた。

蟻の巣に足を伸ばし、俊秀は子供が地団駄を踏むように、何度も何度も地面を踏みつけた。最後の仕上げに、これでもかと靴底を地面にこすりつけ、巣穴を塞ぐ。はじめからここには何もなかったかのように、巣穴の出入り口はなくなった。餌を運んできて、行き場を失った蟻たちが右往左往している。我が家を探している。安寧の我が家、生活の基盤であり、全てであった巣を失い、途方に暮れているようだ。その蟻までも俊秀は踏みつけ、蹴散らした。辺りは黒胡麻を蒔いたようになった。

マンションの八階にある我が家へ帰る。

「父さんはもう会社に行ったの？」

当たり前のことを俊秀は母に訊いた。散歩に行っている間に父が出勤するのはいつものことで、母は困った顔をして俊秀を迎えた。朝食がダイニングテーブルに並んでいる。

「そうよ。何か話があったの？」

母の言葉を無視し、俊秀は自分の部屋に向かった。わざと大きな音を立ててドアを閉める。

一人掛けの小さなソファに座ると、蟻にした自分の行為がいかに子供じみたものに思え、自己嫌悪を覚えた。だが、それはすぐに霧散した。たかが蟻じゃないか――。

「朝ご飯食べないの？」と、ドアの向こうから母が呼び掛ける。

「いらないよ！」

反射的に怒鳴ってしまった自分に、俊秀は我ながら驚いた。これまで母はおろか、人と喧嘩をしたこともなければ言い争ったこともなかった。口論になりそうになると、決まって俊秀から話題を変えた。争いはエネルギーの無駄遣いだと思っている。俊秀は記憶する中で、初めて怒りに我を忘れた。

何故こんなにも腹立たしいんだろう。

何に対して怒っているんだろう。

よく分からなかった。ただ、もうひとりの自分が存在している気がした。もうひとりの自分—そいつは情け知らずで、怒りっぽくて、嫌な奴だった。

その日、俊秀はパソコンを立ち上げなかった。

株価の上下は気になったが、考えないように努めた。何も考えないでいるために、俊秀は久しぶりにテレビゲームをやった。迫り来るモンスターを自分の分身がひたすら斬り殺すゲーム。始めはみたもののなかなか勤が戻らず、殺されてばかりだった。殺されまいと集中する。俊秀は飯も忘れて没頭した。そのうち勤が戻り、画面に飛び散るモンスターの血しぶきが爽快だった。辺りが暗くなっていたのにも気づかなかった。テレビ以外に明かりの灯っていない部屋で、俊秀は飽きることなくモンスターを殺していた。

母が弱々しい声で晩飯を告げ、すぐにドアから離れていった。

そういえば今日はアイスその他に何も口にしていなかった。

腹が減っていたのを思い出した俊秀は、ゲームをやめ、不機嫌な顔でダイニングに向かった。怒鳴ってしまったことの後ろめたさがあったが、それを母にどう伝えたらいいのか分からなかった。

黙ってご飯を口に運ぶ。その様子を怯えた目で盗み見する母。息子に怒鳴られたショックがありありで、俊秀は申し訳なく思った。食事の途中だったが、何も言わずに席を立った。

「もういいの？」と、母が恐る恐る訊く。

「食欲がないんだ」

俊秀はいかにも面倒臭そうに、つつけんどんに返事をした。

「何処か具合でも悪いの？ あんまり根を詰めて仕事をしなくても……」

「うるさいよ！ 放っておいてくれ！」

また怒鳴ってしまった。居たたまれなくなり、俊秀はその場を逃げ、自分の隠れ家に戻った。ベッドに身を投げ出し、またしても自己嫌悪に陥る。

自分はなんて嫌な人間なんだろう。どうしてこうなってしまったんだろう。

子供の頃から父の姿を追いかけ、必死に勉強して優等生で通してきた。最難関の大学に合格し、順風満帆の人生になるはずだった。しかし、道を踏み外してしまった。あの面接からだ。あの日から人生が狂い始めた。いや、もっと前からだったのかもしれない。こうになってしまう時限爆弾を、幼い頃から絶えず抱えていたような気がする。

会社から帰ってきた父に話し掛ける母の声が漏れ聞こえてきた。それが自分の悪口に思えてならなかった。おそらく怒鳴られたことの恐怖と屈辱を父に告げ口しているのだろう。父は母の話をお座なりに聞き、俺が何とかするからと言って宥めているに違いない。それでも父が何も言わないのを俊秀は知っていた。たまに父と顔を合わせると、父は卑屈な笑みを浮かべるだけで、黙って俊秀の横を通り過ぎていった。

風呂にも入らずに俊秀は寝た。

夢を見た。鈍色の月が真っ暗な空に浮かんでいた。黒い波が立っていて、波に月の明かりは映っていない。静かな、何の音も聞こえない海の上——俊秀の体は魔法の絨毯とでもいうべきもので海に浮かび、波の動きのままに揺れていた。心地いい揺れだった。遠い記憶——揺りかごのような優しさがあった。首を左右に向ける。辺りを見渡しても、闇しか見えなかった。ただ何処までも暗い闇が続いている。その闇の向こうに微かな光が感じられ、行ってみたいと思った。

翌朝、俊秀は奇妙な場所で目が覚め、驚いた。寝相は悪くなかったはずなのに、俊秀の躰はフローリングの床の真ん中であつた。ベッドから二メートル近くも離れており、ベッドから落ちたことになるが落ちた覚えはないし、いくら何でも落ちた際の衝撃で起きるはずだと思った。しかし、厳然として俊秀の躰はそこにあつた。

まあ、いい。熟睡していて目が覚めなかつただけだろう——。

だが、腑に落ちないことは他にもあつた。

フローリングの床に落ちている黒い粒——黒胡麻のようなものはよく見ると蟻だつた。俊秀が寝ていた辺りに数十匹の蟻が死んでいた。慌ててパジャマを脱ぐと、その背中にも蟻の死骸がいくつも付着していた。奇妙な思いでパジャマの蟻を払い落とす。

どうして蟻が？

マンションの八階まで蟻が登ってきたというのか。この部屋には食べ物など、餌になりそうなものは何もないのに。あつたとしても、こんなところまで嗅ぎつけるだろうか。それに、外と繋がっているベランダの窓ガラスは閉まっていた、蟻が入ってこられる隙間は何処にもない。いったい何処から侵入してきたのだろうか。

俊秀は考えを巡らせた。

おそらく公園で踏みつけた際に、ジーンズの裾、あるいは靴下に付着したのだろう。その蟻が部屋の中に落ちた——それしか考えられなかつた。しかし、一、二匹ならあり得るかもしれないが、床の蟻は十匹以上だ。そんなに上手い具合に付着するものだろうか。蟻は公園から帰ってきた昨日の朝からずっと部屋にいたことになるが、自分も同じ時間部屋の中において少しも気づかなかつた。部屋の隅、ベッドの下にでも隠れてじっとしていたのだろうか。

卓上用の小さな掃除機で床の蟻を吸い取る。ブォーンという小さな音とともに、蟻の死骸は綺麗に取り除かれた。ゴミ箱に蟻を捨てようとした俊秀は気が変わってやめた。ひょっとしたらまだ生きていて、再び動き出すのではないかと恐れた。昆虫は生命力が強い、死んだふりなどお手の物だろう。結局、蟻は掃除機の中に放っておいた。

今朝の散歩は取りやめた。公園に近づく気になれなかった。回り道をして美沙のマンションまで行くことも出来たが、それだけを目的にするのもさもしい気がした。そもそも、偶然の再会を期待して美沙のマンションの近くをうろついている自分が厭わしかった。

朝飯を食べにダイニングへ向かう。散歩に行かなかったのでダイニングには父がいると思っていたのに、そこに父の姿はなかった。テーブルにはひとり分の食事が乗っていた。

「父さんは？」と、台所の片付けをしている母に訊く。

「もうお出かけになったわ」

「もう？ 息子と顔を合わせたくないみたいだね」

俊秀が嫌味を言うと、母はいつもの困った顔を見せた。

「そんな風にいわないで、急なお仕事なんだから」

「どうだか……」

「何かお話があるのなら伝えておきましょうか？」

「いいよ、別に……」

軽く食事を済ませ、部屋に戻ってパソコンの前に座る。株価のグラフを目で追い、売り買いの注文をする。一日のブランクが響いたわけではないだろうが、勘が外れてばかりだった。午後になって調子を取り戻したものの、結局、数百万の損失を出してしまった。かつてない大負けだった。

その夜、俊秀はまた同じ夢を見た。

暗い闇に包まれたの海を漂っている夢。空にはぼんやりとした月が浮かび、俊秀は魔法の絨毯に乗り、穏やかな波の動きに身を任せていた。

このままどこか遠くへ連れて行ってくれないだろうか。闇の向こうの世界へ、何の苦悩もない光の世界へ――。

鈍い光の月を眺めながら魔法の絨毯に胡座を組み、そんなことを漫然と考えていた俊秀は、もう少しリラックスしたくなって身をゆっくり後ろに倒し、両手を絨毯の上に置いた。そして闇の向こうの世界に思いを馳せていた。

と、手に痛みが走った。

チクリとした、何かに食らいつかれたような痛み――何だろう？

親指の付け根の、痛みの元凶を手で払った。しかし払ったくらいでは、食らいついたそいつは離れなかった。俊秀はペチンと叩き潰した。暗い光の中でよく分からなかったが、動かなくなった黒い粒を目の前に持ってきて凝視すると、そいつは蟻だった。嫌な思いがよぎって下に目を落とすと、俊秀が思ったとおり、魔法の絨毯は蟻だった。無数の蟻が絨毯と化してうごめき、俊秀を戦利品のように何処かへ運ぼうとしていた。俊秀の中に戦慄が走った。

降ろせ！ 降ろしてくれ！

あらん限りの声で叫んだが、一糸乱れぬ動きの、蟻の行進が止まることはなかった。夢の中で叫んでいるのは分かっていた。どんなに叫んでも助けは来ないと思うと、恐怖に苛まれた。ところがそれは現実の世界にも作用したようで、俊秀は自分の声で目が覚めた。

嫌な夢だった。荒くなった息を整えても、忌まわしい浮遊感が頭から離れなかった。

夢で蟻に咬まれた親指の付け根を見ると赤くなっていた。昨日と同じように、俊秀の躰はベッドの上にはなかった。今日はベランダの窓際まで運ばれていた。昨日からさらに一メートル以上伸びている。そしてまたしても、床には数十匹の蟻が死んでいた。

寝相のせいなんかじゃない。夢ではなくて現実起こったことだ。蟻は俺を何処かへ運ぼうとしていた。何処へ運ぼうとしていたんだ？ ベランダか？

ここはマンションの八階。俊秀はゾッとなった。蟻は俺を殺す気だ。

それにしても何処から侵入してきたのだろう。昨日は一日家にいて蟻との接触はなかった。なのに蟻の死骸が床に残っている。

夢の中から現れた——。そんなことはあり得ない。俊秀は馬鹿な考えを笑った。

やはり掃除機の中の蟻が死んでいなかったのだろうと思い、掃除機を開けてみた。黒いつぶつぶ。蟻の死骸はちゃんとそこにあった。生き返ったのではない。ということは新たな蟻が出現したことになる。ひょっとしたら死んだ蟻から特別な匂いが出ていて、それが新たな蟻をおびき寄せたのだろうか。だとしても、新たな蟻はいったい何処から侵入してきたのだろう。

蟻の侵入経路は分からないが、何処から来たのか、その大本の場所は分かっている。

散歩の途中にある公園だ。

生き残った蟻が報復に来たのだろう。

蟻の報復というのも荒唐無稽な話だが、俊秀は確かめずにはいられなかった。

町内を一周し、美沙のマンションの前を通る。歩みを遅くして引き返してみたが、美沙は出てきそうになかった。代わりのように出てきた住人らしきお婆さんの険しい目に、疚しいことは何もなかったが、俊秀は逃げるように公園へ向かった。

公園に着くと、朝のこの時間、いつもなら決まってゲートボールをしている老人が何人かいるはずだったが、今日はひとりもいなかった。先日も避けるようにして帰っていったので、おそらく示し合わせて来ていないのだろう。マンションのおばさんといい、不愉快な連中ばかりだ。

俺が何をした？

普通の仕事をしていないことはそんなに悪いことか？

憤懣を胸中に吐き捨て、俊秀は足の巣穴を確かめるべくツツジの植えてある公園の端へと歩みを進めた。激しさを増す鼓動を意識しつつ、踏みつぶした巣穴を探す。恐る恐る覗き込む。すると巣穴は最初からそこにあったかのように復活していた。蟻もいた。数十匹、数百匹の蟻がうごめいている。巣穴の中には数万の蟻がいるのかもしれない。この蟻が一斉に襲ってきたら――

俊秀は腰が引けた。踵を返して早くこの場を立ち去った方がいいと思った。だが、注視していると襲ってくる気配はまるで感じられなかった。俊秀の存在など眼中にないかのように立ち働き、餌を運んでいる。

やはりあれは夢だったようだ。俺はどうかしている。アマゾンのジャングルじゃあるまいし、蟻が人を襲うわけがない。ましてや、人を餌のように運ぶことなどあり得ない。

ベンチに腰を下ろして大きく息を吸い、高鳴っていた鼓動を鎮める。

朝の空気は爽やかだった。公園は静けさに包まれていて、小鳥のさえずりさえ聞こえてきそうだった。

ようやく落ち着きかけた鼓動がまたしても高鳴ってきた。

いや、復活したからこそ復讐を果たそうとしているのではないか。今は油断させているだけだ。今夜も夢に現れ、今夜こそ俺をベランダに運ぶつもりだろう。

そのとき、「角倉君じゃない？」と呼び掛ける声があった。声の主は美沙だった。何度もマンションの前を通り、偶然の再会を期待していたが、その日が突然やってきた。ついに奇跡的な僥倖が訪れた。大金を稼ぐようになれば堂々と対面できると思っていたが、しかし、いざそれが現実になり、美沙を目の前にすると俊秀はうろたえた。新社会人として立派にリクルートスーツを着こなしている美沙の姿が眩しかった。僅かな間にすっかり顔つきが変わり、学生るとき以上に一分の隙も窺えない。颯爽としているその様は、社会人としての自信に満ち溢れていた。

まともに会話するのはおよそ一年ぶりだった。半年前の卒業式にはゼミのみんなに合わせる顔がなかったので出席しなかった。きっと嬉しい謝恩会が催されたことだろう。

「元気そうだね。今から出社？」

気後れを感じながらも、俊秀は学生時代のように気さくに話を始めた。

「ええ。……そんなことより、角倉君はお母さんから話を聞いた？ わたしの話」

そんなことより——美沙は会話を急いでいた。出勤前で時間がないのかもしれないが、それにしても冷たい言い方だった。そして美沙は妙なことを口にした。美沙が母にした話——俊秀には覚えがなかった。一日のほとんどを家の中で過ごしているのだから、美沙からの言付けがあればすぐに伝えられるはずだが——

「何も聞いてないよ。何のこと？」

「そう。電話したんだけど……お母さんに」と言い、美沙が眉根を寄せる。

「直接携帯に電話してくれたらよかったのに。番号は知ってるよね？ 分からなくなったのなら教えるけど」

美沙は首を振った。

「いったい何？ 何の話？」

言いにくそうにしている美沙を見ていると、俊秀は不安を覚えた。よくない報せなのは間違いないようだ。

「お母さんから伝えてもらおうと思ったんだけど……怒らないで聞いてね」

言い訳の前置きをし、美沙が重い口を開いた。

「うちのマンションの近くに変質者が出るって噂があるのよ」

「変質者？」

怪訝そうな顔をする俊秀に美沙が頷く。

「変質者っていうのは言い過ぎだと思うんだけど、挙動不審者がいるのは確かなのよ」

「変質者でも挙動不審者でもいいけど、それと母さんへの話がどう関係するの？」

「その変質者っていうのが——どうも角倉君のことらしいのよ。青いTシャツにジーンズ。被害がこれといって出ていないからそれほど問題にはなっていないけど……」

美沙の思いも寄らない言葉に、俊秀の頭は真っ白になった。公園の老人たちが避けたのも、マンションのおばさんが険しい目を向けたのも、どうやらそれが原因のようだ。世間からそんな風に見られていたことが俊秀はショックだった。普通の仕事に就いていない者は変質者と同レベルということか。

「俺が？ 馬鹿な。確かに青いTシャツを着ているけど、そんな奴は大勢いるよ。俺は変質者なんかじゃない」

「それは分かっているけど……でも毎朝、私のマンションの前を通っているでしょ」

美沙の口調が変わった。非難めいていて、反論を許さない強さがあった。

美沙に知られていた。

散歩の目的を見透かされていたようで、俊秀は恥ずかしくて仕方がなかった。

「た、ただの散歩だよ。散歩のコースなんだ。散歩しているだけで変質者扱いされるなんて……誤解しないで欲しいな」

俊秀は必死に抗弁した。抗弁すればするほど怪しさが増すような気がしたが、止められなかった。

「誤解ならいいんだけど……。その変質者はマンションの中を探るように見ていたらしいわ」

「だったら別人だよ。俺じゃない。俺は前を通っているだけで、そんな真似をしちゃいないよ」嘘を吐くしかなかった。

確かに覚えがあった。美沙が出てくるかもしれないと微かな希望を抱き、マンションの様子を窺ったことは何度もあった。

「ううん」と、美沙が首を振った。

何が違うのか、美沙の言葉を待っていると、美沙は刺すような目で俊秀を見た。

「別人じゃないわ。私も見たもの」と、決然として言う。

「見た？ 何を？」

美沙が何を見たのか、俊秀は恐ろしかった。一度だけやってしまったあれだとすれば、もう言い逃れは出来ない。

「角倉君が私の郵便受けの前に立っているところを見たのよ。私の郵便物を調べてたんでしょ？」

見られていた。

俊秀は奈落の底に突き落とされた気分だった。

あれは郵便物を調べていたのではなく、美沙にあまりに出会わないから、今も住んでいるのか確かめようとしただけだ。ちょっと郵便物を拾い上げたりはしたが、それだけのこと。しかし、言い訳するにしてもそんなことは言えなかった。郵便物を盗もうとしていたと思われるならまだしも、部屋に忍び込もうとして下調べをしていたととられかねなかった。

「違うんだ……」

何の考えも浮かばず、その場凌ぎの抗弁を試みる。

「違うって、何が？」

美沙が高圧的に、強く問い質す。

俊秀が何も言い返せないでいると、それ見たことかと美沙は目を細めた。

「とにかく……もう近づかないで欲しいの。迷惑なのよ。マンションにはわたしたちが同じ大学に通っていたのを知ってる人もいて、角倉君と仲がいいなんて思われたくないのよ」

迷惑？ これまでずっとそんな風に思っていたのか。同じ大学に通い、同じゼミをとっていたのは事実じゃないか。

美沙が言葉を続ける。

「角倉君のお母さんには伝えてあったんだけど、この際だから角倉君にも言うておくわ。わたし……結婚が決まったの。来年だけどね。だから変な噂が立っては困るのよ。ただでさえ近所に住んでいるんだし……。大学のときも近所に住んでいるというだけでからかう人がいたのよ。勘弁して欲しかったわ」

結婚——その言葉が俊秀に重くのしかかった。彼氏の存在を考えてもみなかった自分の愚かさが厭になり、俊秀は自分を笑うしかなかった。

微笑みを浮かべ、精一杯に強がってみせる。

「おめでとう」

「えっ？ ああ、ありがとう」

戸惑いながらも美沙が少しだけ顔を赤らめる。

俊秀はその顔を踏みにじりたい衝動に駆られた。美しいと思っていた美沙の顔が、乙に澄ました計算高い顔に見えてくる。

「相手はどんな人？」

美沙のことだから、言い寄ってきた男の中から飛び切りのエリートを選んだことだろう。俊秀の勘は当たった。

「普通のサラリーマンよ。『ムトウ・エレクトロニクス』に勤めているの」

謙遜しながらも、美沙は何処か誇らしげだった。

ムトウ・エレクトロニクス——俊秀の脳裏に、あのときの面接官の、嘲笑するような顔が浮かんだ。そして美沙の相手は偶然にも俊秀を拒絶した会社にいた。会社にも美沙にも拒絶され、彼氏には力の差をまざまざと見せつけられ、俊秀の憎しみは倍加した。

「よかったね。『ムトウ・エレクトロニクス』なら一流だ」

「そうなの？ よく知らないけど」と、美沙がはにかんで言う。

知らないわけがない。日本有数の大企業だ、有名女優のコマーシャルは頻繁に流れている。

美沙の過剰な謙遜に腹が立った。馬鹿にされた気分だった。美沙には話していなかったが、ゼミの誰かから伝え聞いて、『ムトウ・エレクトロニクス』に落ちたのを知った上で惚けているのかもしれない。だとしたら彼氏と二人して笑いあったことだろう。

「とにかく、もうやめてね」

美沙が腕時計を覗き込んだ。迫り来る出勤時間を気にしているようだ。

「わかったよ」と、力なく俊秀は答えた。

美沙の住むマンションには近づかないことを約束し、俊秀は自分のマンションに帰って行った

。

朝食をさっさと済ませ、パソコンを立ち上げる。

ムトウ・エレクトロニクスの株価をみる。

人気企業だけあってさすがに高かった。高値安定。今持っている自分の資金で買える株は微々たるものだった。それでも俊秀の決心は揺るがなかった。『ムトウ・エレクトロニクス』の株を買い進め、どれだけ時間が掛かっても筆頭株主になってやる——。一個人にはまずもって実現不可能な野望だが、妄念に取り憑かれた俊秀には何も見えていなかった。やらずにはいられなかった。

いくつかの右肩あがりの株に目をつけ、保有していた株と資金を全て注ぎ込んだ。倍々で資金を増やし、『ムトウ・エレクトロニクス』の株を買うつもりだった。生半可なことをやっていたのではいつまで経っても『ムトウ・エレクトロニクス』の筆頭株主になど成れるわけがない。

一か八か、生か死か。

ところが、これまでの経験からして値上がりは確実だと思って買った、順調に上昇していた株がどういうわけか突如、値を下げ始めた。市況は好調だったのに、俊秀の買った株だけが狙い撃ちにあったかのように下降線をたどり、とうとう戻らなかった。

俊秀は茫然とパソコンの画面を眺めながら、自分の無力さを思い知った。

巨象に戦いを挑んで簡単に踏みつぶされてしまった。

蟻は巨象を倒すというが、俺は蟻にすらなれないのか。

いや、そんなことは蟻の方で願い下げだろう、どうやら嫌われてしまったようだから。まあ、その原因は自分にあるのだが――。

今度は蟻が俺に戦いを挑みにやってくる。それは今夜だ。

夕陽がまだ沈みきっていないうちから、俊秀は父が愛飲している酒を飲んだ。咎められるしかないが、それはそれでよかった。むしろ咎めて欲しかった。しかし、父はまた卑屈な目で避けようとするに違いない。無一文になったことを教えれば喜ぶだろう。それみたことかと得意になって高説をたれるだろう。

さすがに高級スコッチは旨かった。旨かったが、頭の中を這い回る蟻を忘れさせてはくれず、怖くて堪らなかった。今度は蟻が俺を餌にしようと戦いを挑みにやってくる。それは今夜だ。

買い物から帰ってきた母が、酒を飲んでいる俊秀をいつもの怯えた目で一瞥していった。そそくさと自分の領域である台所に立ち、夕食の準備に忙しい振りをしている。

「父さんは今日も遅いの？」

「そうじゃないかしら。最近、お父さんのことをよく訊くけどどうかしたの？」

「どうもしないよ。どうかしなきゃ訊いちゃいけないの？」

「そういうわけじゃないけど……」

空いたグラスに酒を注ぐ。氷を足して掻き混ぜる。顔が火照ってきて、少し寄ったかな、と俊秀は思った。

「今朝、浅井美沙に会ったよ」

「浅井美沙？」

「大学のときの知り合い。母さんに電話をかけたって行ってたけど」

「電話？ ああ、あの女の人」

背を向けて料理をしていた母の声音が不自然だった。何かを誤魔化すかのように響きがあった

。「思い出した？ それとも、惚けられないと観念した？」

「惚けるだなんて……忘れていただけよ」

「どっちでもいいけど、僕が変質者らしいって聞かされてどう思った？」

「嘘だと思ったわよ。そんな話、信じられるわけがないでしょ。だから余計なことを耳に入れたくなくて……」

「それで僕に何も言わなかった……やっぱり惚けてたんじゃないか」

母は身を縮めて料理を続けている。

「でも、本当はそうかもしれないって思ってたんだろ？ そんな話をする僕が暴れるかもしれないと思って言わなかったんだろ？ そうさ、僕は変質者だよ。浅井美沙をつけ回していたんだからね。ところが美沙は結婚が決まっていた。何も知らなかった僕はとんだピエロだよ。そのうち振り向いてくれるかもしれないなんて思って……馬鹿だったよ。惨めだ。今の僕の状況は本当に惨めなんだ。今日、株に失敗して無一文になってしまったんだ。スッカラカン。笑っちゃうだろ？ 何もかもが上手くいかなくて……。笑ってもいいんだよ。笑えよ！」

俊秀は怒鳴り声を上げ、ふらつく足で立ち上がった。完全に酔っていた。母を睨んでいた目に涙が滲んだ。

「父さんの酒、高いだけあって旨いね。前から飲んでみたかったんだ。勝手に飲んだりして、父さん怒るかな？」

「そんなことで怒りはしないでしょうけど……」

「けど……何？ どうして飲ませたんだって母さんに小言くらい言うだろうね、僕には何も言わないくせに。高いからって有り難がって、チビチビ飲んで、父さんらしいよ。いつもひとりで飲んで、父さんは僕と酒を酌み交わそうとはしなかった。たったひとりの息子だというのに……  
ねえ、どうして？ そんなに嫌なの？」

堪えていた涙が零れ落ちた。涙を手の甲で拭う。

「ところで……ガムテープは何処？」

急に話が変わり、母は一瞬戸惑いを見せた。しかし、すぐに元の怯えた表情になり、慌てて押し入れの中からガムテープを持ってきた。

「何に使うの？」と、母が恐る恐る訊く。

「蟻だよ。蟻が入ってこないように隙間を塞ぐんだ」

「蟻？ 蟻が出るの？」

「こっちには出ない？ だったらやっぱりベランダからなのかな。どこから来るのか分からないけど、今夜、僕と最終決戦をしにやってくるんだ。だから目張りをして入れないように、先に準備して出し抜いてやるんだ。蟻の奴、悔しがらうな」

くくく、と笑い声を立てながら、俊秀は自分の部屋に戻った。

すぐにドアの隙間の全てをガムテープで塞ぐ。何重にも重ね、蟻の鋭い牙でも食い破られないようにする。ベランダの窓も塞いだ。アルミサッシだからそんな隙間はないはずだが、用心した

。出入り口の全ての隙間を塞ぎ、俊秀は一安心した。一安心すると躰を動かしたせいか、酔いが回ってきて睡魔が襲ってきた。眠ってはいけない。眠ったら奴らの思う壺だ。夢の中からにしろ何処からにしろ、知らない間に奴らはやってきて、俺をベランダに運ぶ――。

眠らないよう、俊秀はゲームを始めた。酔っていてもゲームをしていれば一晩中でも起きていられると思った。睡魔と戦いながらモンスターを斬り殺そうとするが、酔った頭では集中力を欠き、殺されてばかりだった。思考力は完全に失っていた。ときにうつらうつらとしても、手だけは動いていた。時間の感覚がなく、何時間プレイしていたのか分からなかった。暗くなった部屋には画面の明かりだけがあった。

と、ゲームの画面の端が動いた気がした。

チラチラと——確かに何かが動いた。

長時間のプレイで目が疲れただけだろう——。

しかし、それは違っていた。

ゲームの画面は縁から次第に黒く浸食され、ついには画面全体が黒一色になった。

蟻だった。

蟻がゲームの画面を覆っていた。

俊秀は驚いて立ち上がり、ドアの近くにある電灯のスイッチを入れた。明かりが点き、部屋を見渡すと、ゲームをやっていた間に床も壁も天井も、何処もかもこもがうごめく蟻で覆われていた。

何処から入ってきたのか。

ドアを見る。

ドアの隙間から入ってきたのだろうと思ったが、ドアの下にたかっている蟻をはたき落として調べると、ガムテープはそのままだった。這い入る隙間はない。ドアの上、あるいは横から入ってきたのかもしれないが、とても調べる気になれなかった。はたいた際に何匹もの蟻に咬まれ、もう触りたくなかった。

蟻を踏みつぶしながらベランダに向かう。

蟻に覆われて黒くなったカーテンの端に息を強く吹きかけ、蟻を吹き飛ばす。そっとカーテンを開けると、窓ガラスには蟻は張り付いていなかった。暗い闇夜が窓の向こうに広がっている。さすがの蟻もガラスは滑るようだ。だが、目張りをしたガムテープの部分だけは黒く覆われていた。そこから入ってきたのかもしれない。しかし、ロックされたアルミサッシの隙間から入ってきたとは、俊秀はどうしても思えなかった。

蟻がアルミサッシに穴を開けた——

蟻には蟻酸というものがある。蟻酸がどれくらい強力なものかは知らないが、これだけ多くの蟻が集まれば、あるいはアルミサッシに穴を開けることくらい可能なのかもしれない。

俊秀は胸中で自分を笑った。

すでに部屋は蟻で占領されているというのに、今さら侵入経路が分かったからといってどうなるものでもない。

得てしてそんなときに答えは見つかるもので、何気なく戻した視線の先にそれはあった。

エアコンだ。配管パイプから侵入したのだろう、エアコンの吹き出し口から滝のように無数の蟻が落ちている。ポタポタと落ちては俊秀を目がけて集まり、踏み潰されても踏み潰されても数を頼みに俊秀に襲いかかる。足を咬み、天井からも黒い雫が次々と落ちてきては頭皮を咬んだ。頭の蟻を払う。ぐずぐずしてはいられなかった。何匹かが首の隙間からTシャツの中へ入った。急いで窓ガラスのガムテープを剥がし、外に出る。窓をしっかりと閉め、身にたかっていた蟻を払い落とす。ベランダへ出た際に出てきた蟻は踏み潰したが、部屋の中にはまだ無数の蟻がいた。それらが窓に集まってきている。やがて蟻は山を作り、窓ガラスを覆ってしまった。

俊秀は窓ガラスをしっかりと押さえた。今にも蟻が窓ガラスを割りそうで、怖くて仕方がなかった。蟻は何とか外へ出ようとうごめいている。鋭い牙を動かしながら、上へ下へ、右へ左へ、何処かに隙間はないかと探し回っている。そして諦めたかのように、窓ガラスを覆っていた蟻の山はその高さを次第に低くし始めた。ひとときの安堵を覚え、俊秀は溜め息を吐いた。

蟻のいなくなった窓ガラスを覗き込み、中の様子を窺う。すると、一度は壁や天井に散った蟻が同じ方向に移動していた。俊秀の立つ位置からは見えなかったが、蟻が何処に移動しているのか、俊秀には分かった。エアコンに向かって移動している。

今度は配管パイプを通して外に出る気だ。

室外機に目をやると、部屋の中にいた夥しい数の蟻が這い出してきた。室外機からばかりではなかった。ベランダの柵のあらゆるところから蟻が筋をなして現れ、ベランダはあっという間に蟻に占領されてしまった。

蟻が俊秀の躰を這い登る。咬む。

「よせ！ やめろ！」

深夜の静まりかえった闇に、俊秀の叫びが虚しく響く。

俊秀はまわりつく蟻を払い、辺り構わず踏みつけた。そんな抵抗は無数にいる蟻の前では無に等しかった。Tシャツの中に入り込み、蟻は身体中を咬んだ。口に入ってきた。つばと一緒に吐き出すが、蟻は死を恐れずに次々を入ってきた。目にも入ってきた。反射的に目を閉じたが、蟻は瞼をこじ開けようとする。耳にも鼻にも入ってきた。手で払いのけるが、どうにもならない。俊秀はこのまま死んでいくんだと思った。

突然、フワリと浮き上がる感覚があった。

足が宙に浮き、バランスを崩して尻餅をついたが痛くはなかった。クッションのように柔らかで、それは夢で見た魔法の絨毯に乗っているときと同じだった。

絨毯がフワリフワリと浮き上がる。身体中を攻撃してくる蟻を払いながら、俊秀は目を開けた。蟻が目に入ってきて、入るに任せておいた。俊秀の躰を持ち上げていたものは、絨毯というよりも柱だった。黒い柱はベランダの柵を越えそうな高さになっていた。俊秀は驚かなかった。むしろ冷静に事態を受け止めた。

漆黒の闇に淡い光が見えた。

遠い記憶の世界に戻りたくて、俊秀は届くはずもない淡い光を掴もうと——手を伸ばした。